



平成28年度 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室 “S-チル”

震災子ども支援室 6年間の活動報告書 —2011年～2016年のまとめ—

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいて活動しています。



東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室 “S-チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
TEL&FAX : 022-795-3263
E-MAIL : s.children@sed.tohoku.ac.jp




この冊子は環境に配慮した
「本なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インク
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。





平成28年度
震災子ども支援室
6年間の活動報告書
-2011年～2016年のまとめ-

目次

■ 概 要・スタッフ	01
■ 活動内容	
1. 相談実績	03
2. 里親サロン	12
3. 遺児家庭サロン	13
4. 遺児・孤児対象学習支援	14
5. 支援者支援	15
6. 研修・講演・出前授業	15
7. 関係機関との連絡会議	16
8. 震災子ども支援室主催による会議、シンポジウム、研修会・座談会	17
9. 親族里親面接調査・遺児家庭アンケート調査	20
10. 広報・出版物・報告書・執筆	21
11. その他の活動	25

平成28年度 「震災子ども支援室」活動報告

● 概要

震災子ども支援室(S-チル)は、2011年3月11日の東日本大震災で親をなくした子どもたちへの支援を願う篤志家の10年間の寄附を原資として、2011年9月に開室しました。震災後6年を過ぎた今年度は、何をどこまでやってきたのか、活動の後半に向けて、これからは何を目指していくのかについて、考えることの多い1年であったように思います。本報告においても、平成28年度の活動報告に加えて、これまでの活動を概観する機会にしたいと考えました。このため、本報告書は例年よりも遅い時期の発行となり、皆さまにご心配とご迷惑をおかけしましたことを最初にお詫び申し上げます。

6年間で振り返ると、行ってきた活動は多岐にわたっています。遺児・孤児支援を優先としながらも、震災で大切な人やものを失ったことで生きづらさを感じている子ども、その子どもを育てる周囲の大人たちについても広く視野に入れ、それぞれのニーズに応じて活動を行ってきました。東北沿岸の町全体は様々な意味で多大な喪失状況におかれていましたので、子どもの心理的な安定のためには、子どもの身近に存在する大人も含めて支える必要があると感じての出発点でしたが、そうした当初の姿勢は現在も変わっていません。開室から現在までの活動は主として以下のとおりです。

①当事者相談(電話相談・来室相談・訪問相談) ②親族里親サロン ③遺児家庭サロン ④遺児・孤児対象学習支援(夏休み・冬休みしゅくだい塾) ⑤支援者支援(スーパーヴァイズ、リラクゼーションなど) ⑥研修・講演・出前授業 ⑦関連機関との連絡会議 ⑧震災後の子ども支援に関するシンポジウム ⑨調査活動(親族里親面接調査、遺児家庭アンケート調査) ⑩その他

6年間の推移をみると、これらの活動の中にも時間とともに縮小傾向のもの、維持されているもの、展開中のものに分類することができます。

まず、縮小しているものとしては、支援者支援、震災にまつわる心のケア研修・講師依頼、関連機関との連絡調整会議があげられます。震災直後に要請が多かったこれらの役割は、言わば緊急対応の一部でした。したがって、これらの活動が時間とともに減少に向かうことは、自然な推移と言えるでしょう。しかしその一方で、そうした機会が減るということは、関係者間の情報交換や知見の共有の場が減少しているということでもあります。今後の活動においても、他の支援者、組織との情報交換は折に触れて行ってほしいと思います。

維持されているものとしては、当事者相談、親族里親サロン、子ども支援に関するシンポジウムがあげられます。当事者相談は、当初より数的には減少しましたが、"自然減少"の裏に隠れた課題、時間の経過によって逆に生じてくる新たな課題、地域や個人ごとの状況の差異などについては、常に留意しながら対応にあたらなければなりません。例えば、子ども本人からの発信や相談の微増、チラシ配布後には一時的ではあっても相談数が増加する傾向、電話から聞こえる「今でも話していいですか」という声などは、相談総数が示すものを超えて、耳を傾ける場所がまだ必要であることを伝えていると思われます。復興の声が高まる中であればなおさらかもしれません。沿岸部における高台移転の動きは、もちろん明るい話題ですが、そうした環境変化によって、大人や子どもたちの生活や人間関係はどう変わるのかということについても、ともに見守っていきたくと思っています。

親族里親サロンは、支援室が最初期から開始した取り組みです。里親措置解除後も継続参加を望む方

や、一時期は休止し再び参加なさる方もみられます。制度としての親族里親には終了時期があるわけですが、子どもと保護者としての人間関係に終わりはありません。里親の高齢化と子どもたちの自立を見据えながら、この取り組みも、参加数の多少にかかわらず継続実施していくことの意味を強く感じているところです。

毎年開催しているシンポジウムは、各回のテーマに合わせて支援者や一般の方々に参加して下さっています。その年、何をテーマにするかということは、支援室が、現状をどのようにとらえ、どこへ向かおうとしているかを問われていることに他なりません。広域となった被災地の「今」を知る上でも、それぞれの場で支援を続ける方々につながる上でも、大事にしていきたい取り組みのひとつと考えています。

展開中のものとしては、特に、遺児・孤児対象学習支援をあげたいと思います。夏休みおよび冬休みしゅくだい塾として、2015年度の石巻、2016年度は石巻と陸前高田で開催してきましたが、回を重ねるにしたがって参加者が増加し、他の地域からも開催希望を頂いています。また、携わる大学生スタッフ側からも、自分にとって意味ある体験になっているという声が聞かれています。学習内容やプログラムの進行、開催時期等には柔軟に対応しながら、子どもたちの充実した学習体験のために、一層の工夫を重ねていくつもりです。

震災子ども支援室が開室当時に掲げた、「時間の中での支援」、「関係の中での支援」、「文化の中での支援」の3本柱は、変わっていくことの是非を問うのではなく、変わっていくことの意味を考えることの重要性を示しています。支援室に変化が必要なこと、変化しないことが求められることをよく考えながら、今後も活動していきたいと思っています。

皆さまには、今後とも、震災子ども支援室へのご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願いたします。

(加藤 道代)

平成29年11月1日

● スタッフ

室長：加藤 道代 (教育学研究科人間発達臨床科学講座 教授 臨床心理士)

研究員：一條 玲香 (教育学研究科震災子ども支援室 特任助教 臨床心理士)

相談員：平井 美弥 (臨床心理士・臨床発達心理士)

相談員：押野 晶子 (保健師・看護師)

相談員：大堀 和子 (社会福祉士)



平成23年3月20日 石巻市中瀬公園



平成29年2月21日 石巻市中瀬公園

1 相談実績

相談活動には、本人・関係者相談をはじめ、支援者支援、情報交換やケース会議といった他機関との連携が含まれる。

※5年分の相談件数をまとめるにあたり、新たなカテゴリーに基づいた分析を加えています。
このためこれまで示されていた件数と異なる場合がありますので、ご理解をお願いいたします。

● 5年間の相談概要

1 総相談回数の推移

平成24年度から平成28年度における総相談延べ回数は、新規相談と継続相談を合わせて1175回であった。

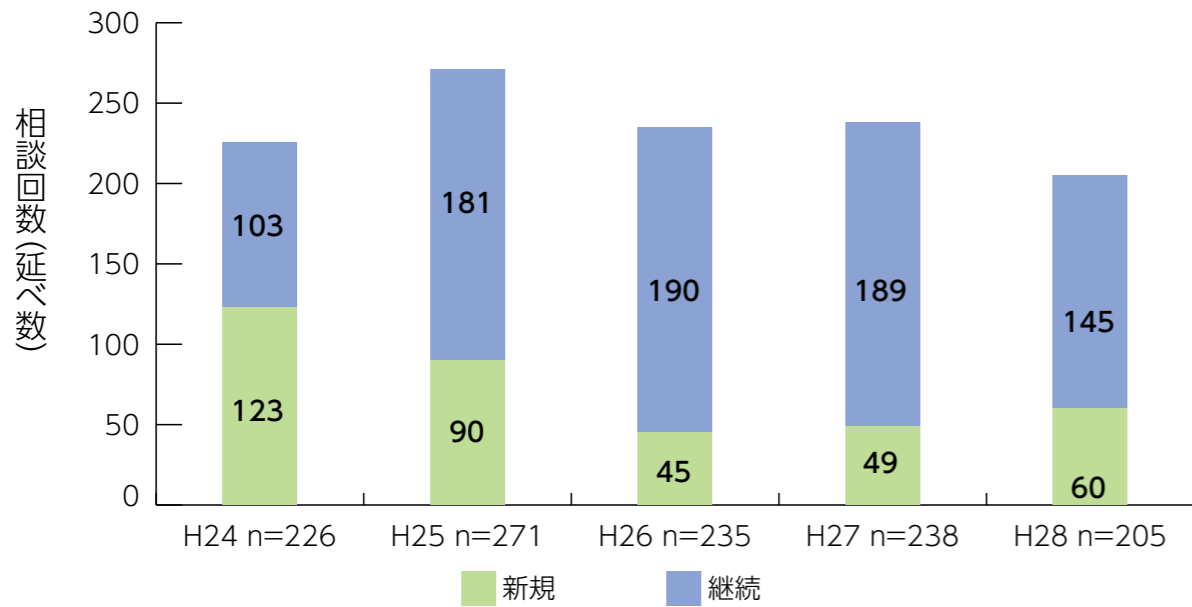


図1 総相談回数推移

2 ケース数(実数)の推移

新規に受け付けたケース数は、時間の経過とともに減少傾向にあったが、平成28年度に増加に転じている。

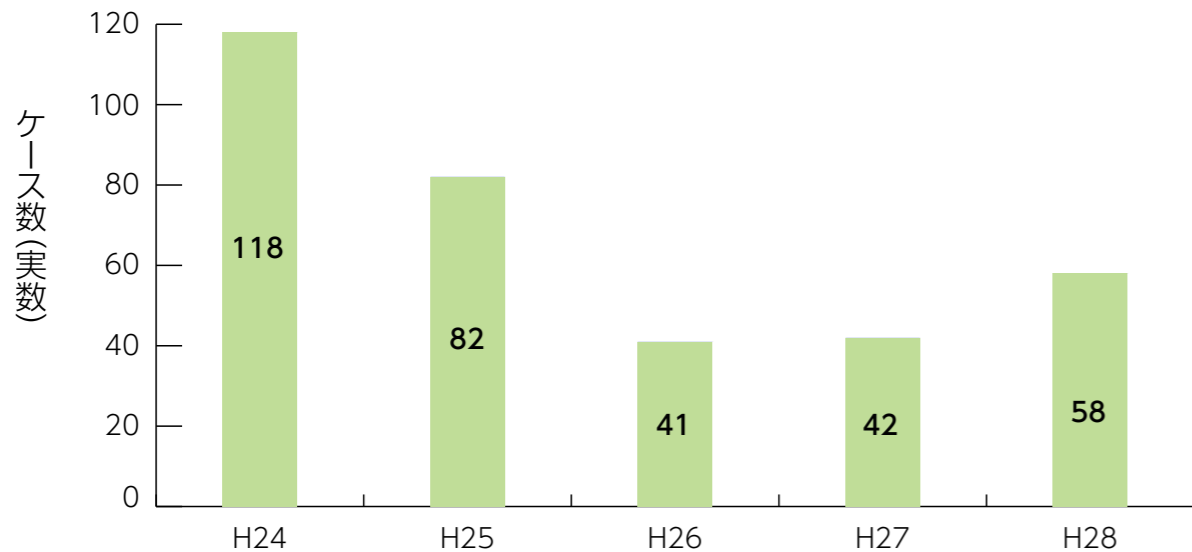


図2 ケース数推移

3 相談者地域推移

相談者を地域別にみると、「震災子ども支援室」が位置する宮城県からの相談が圧倒的に多い。平成27年度以降は岩手から、平成28年度以降は福島からの相談が増加している。この背景として、平成27年度に岩手、平成28年度に福島の国公立小中高・特別支援学校にチラシの配布をおこなったことが考えられる。

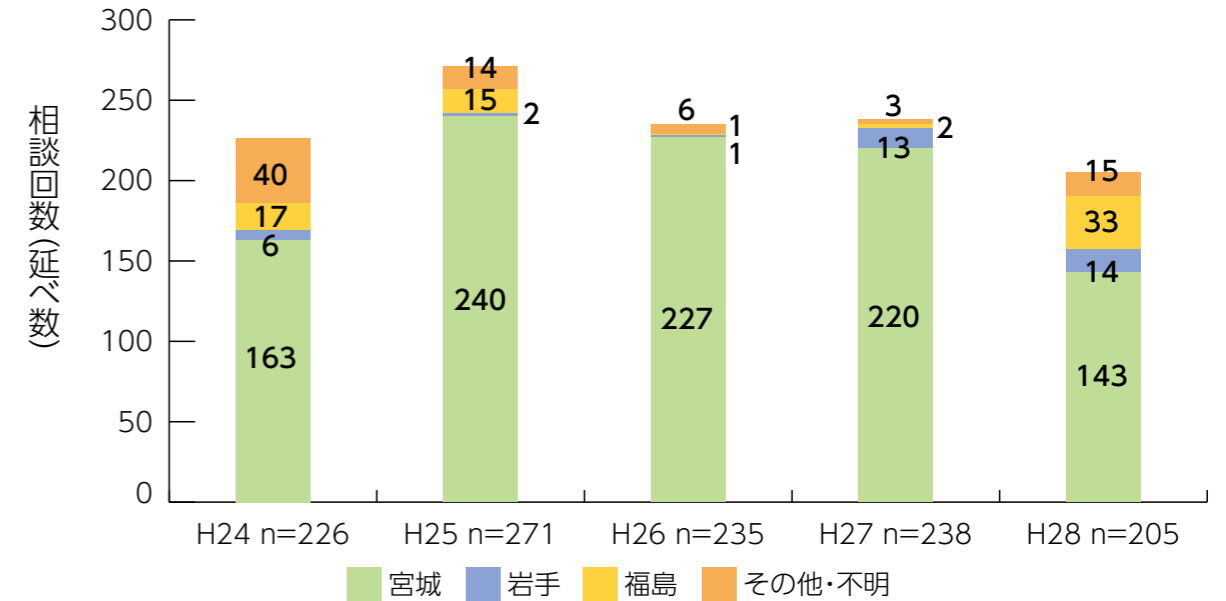


図3 相談者地域推移

4 相談形態推移

電話での相談が最も多く約7~9割を占める。メールでの相談は通常行っていないが、チラシにメールアドレスを載せているため、メールで相談が寄せられることもある。

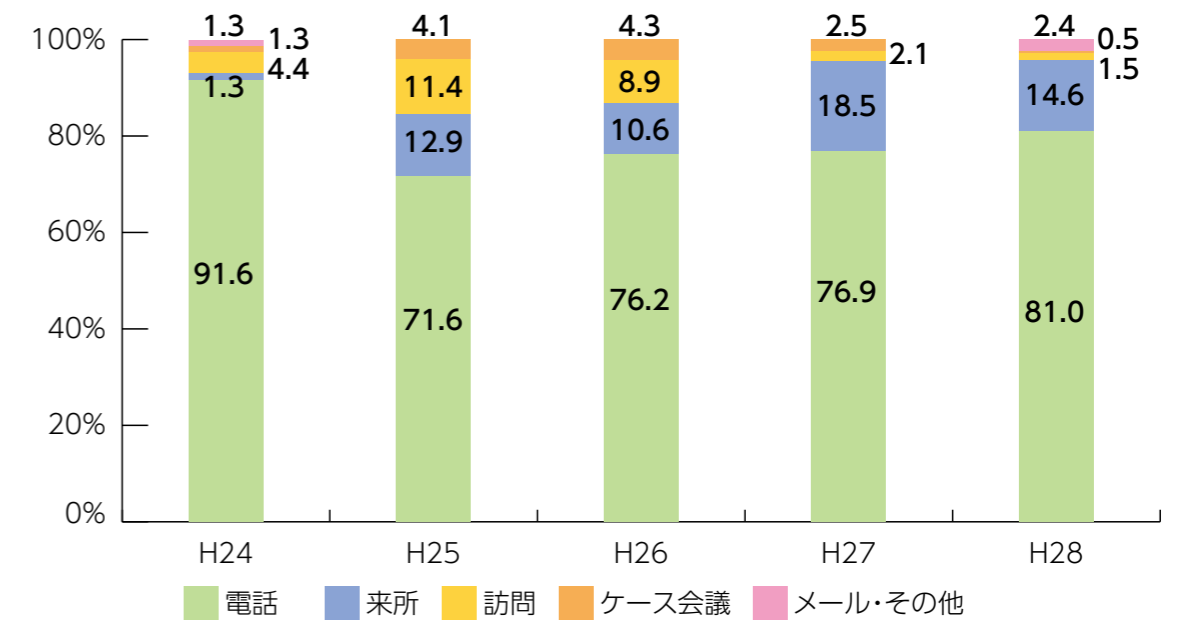


図4 相談形態推移

5 相談内容推移(相談回数(延べ数))

各年度を通じて、「体調・精神不調」に関する相談が最も多い。「子育て・発達」に関する相談が平成26年以降減少した一方で、「学校関係」、「家庭環境」に関する相談が多くなっている。

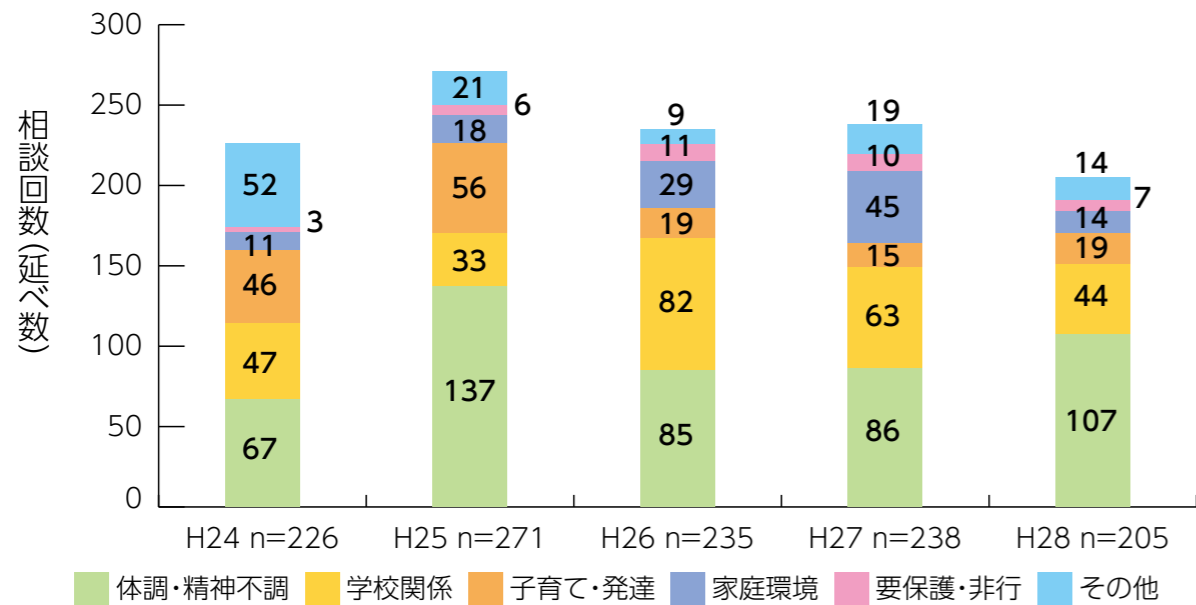


図5 相談内容推移(相談回数)

6 相談内容推移(ケース数(実数))

ケースごとにみると、「体調・精神不調」と「子育て・発達」に関する新規相談が減少傾向にある一方で、「学校関係」は毎年20件前後で推移している。図5と比較すると、「体調・精神不調」に関する相談は継続相談が多いことがわかる。

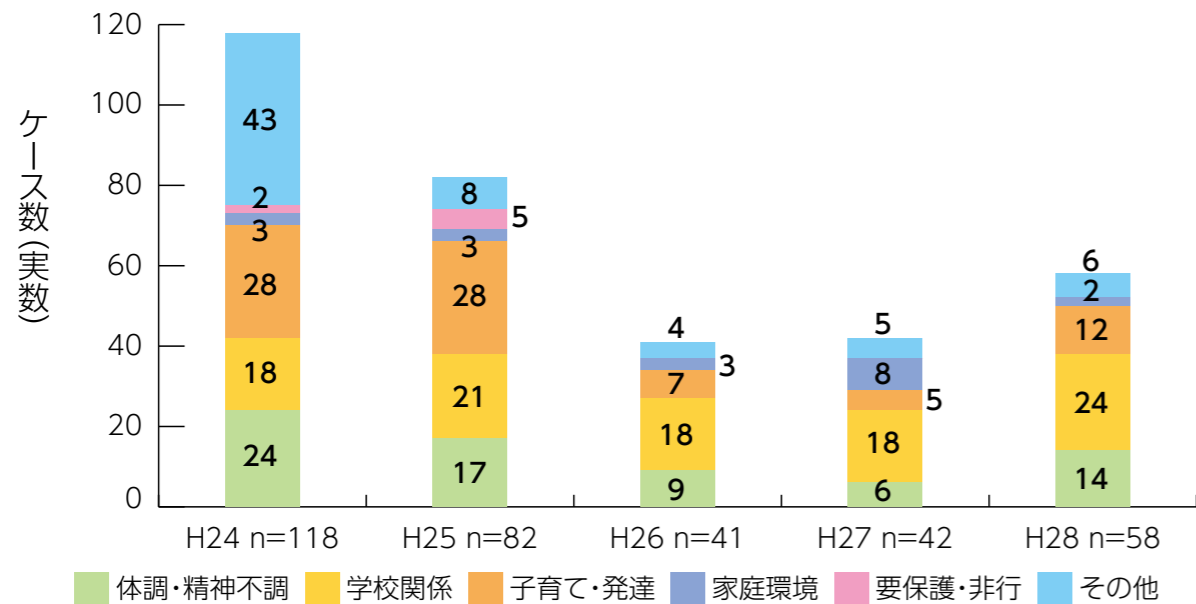


図6 相談内容推移(実数)

7 相談者推移

総相談件数に占める相談者の割合と相談回数を示した。本人からの相談割合が高く、増加傾向にある。

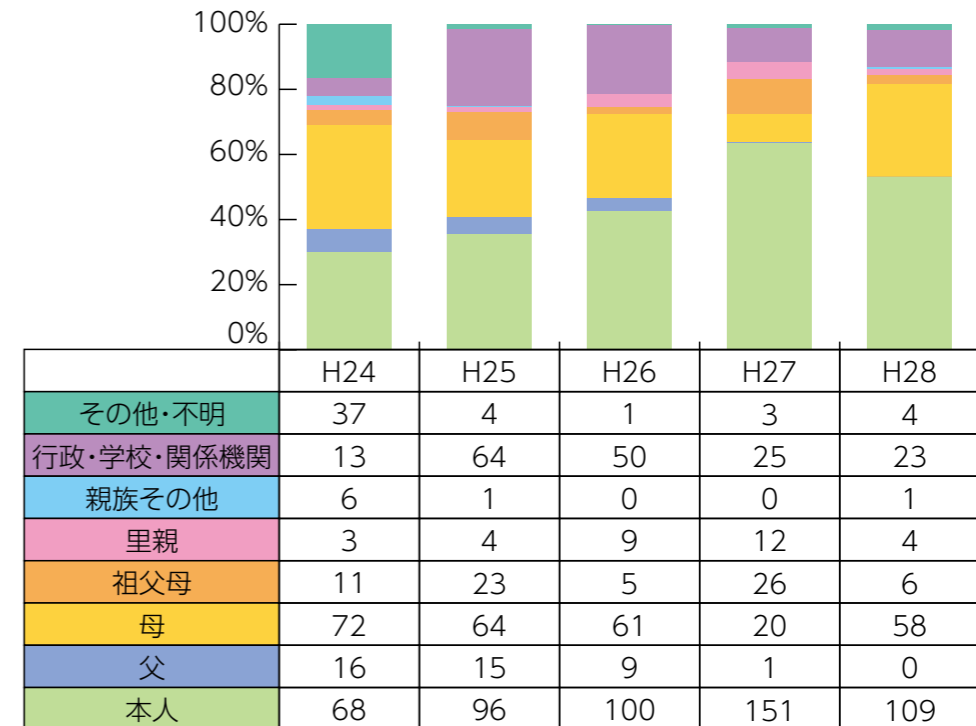


図7 相談者推移

8 本人相談

①相談内容推移

「体調・精神不調」に関する相談が最も多く、毎年半数近くを占めている。平成27年以降「学校関係」に関する相談が増加している。

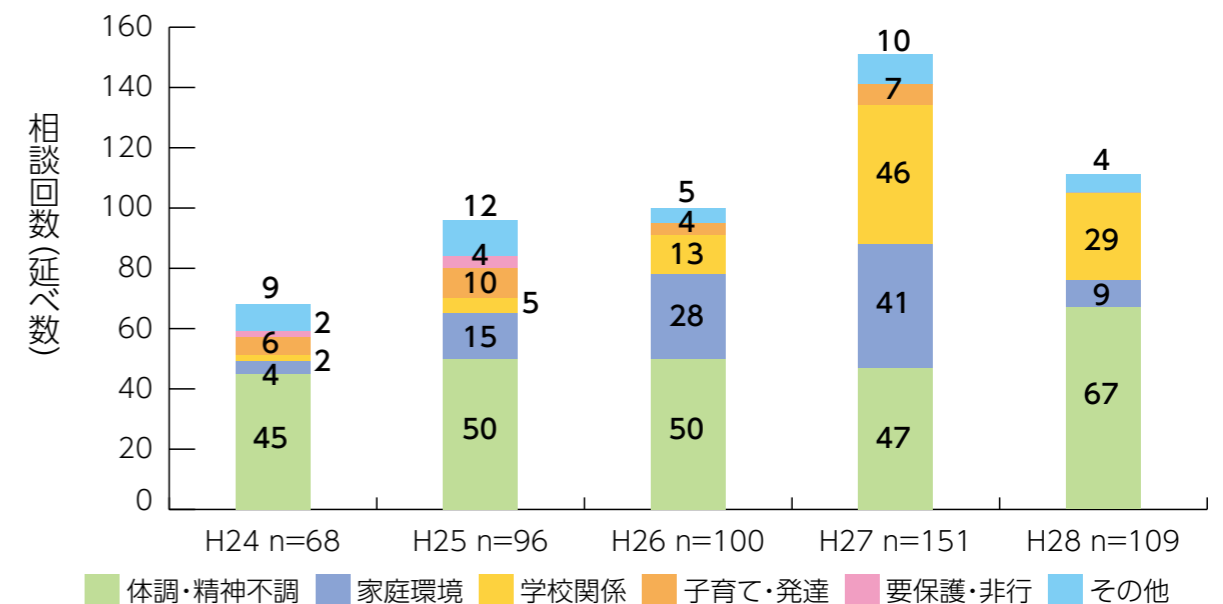


図8-1 本人相談における相談内容推移

②相談者の属性推移

震災当時子どもであった「児童・生徒」、「専門・大学生」からの相談が増加傾向にある。学生以外では、平成24年度は有職者からの相談が、それ以降は無職者からの相談が多い。平成24年度に有職者の相談が多い背景として、支援者自身の相談が多く寄せられたことが考えられる。

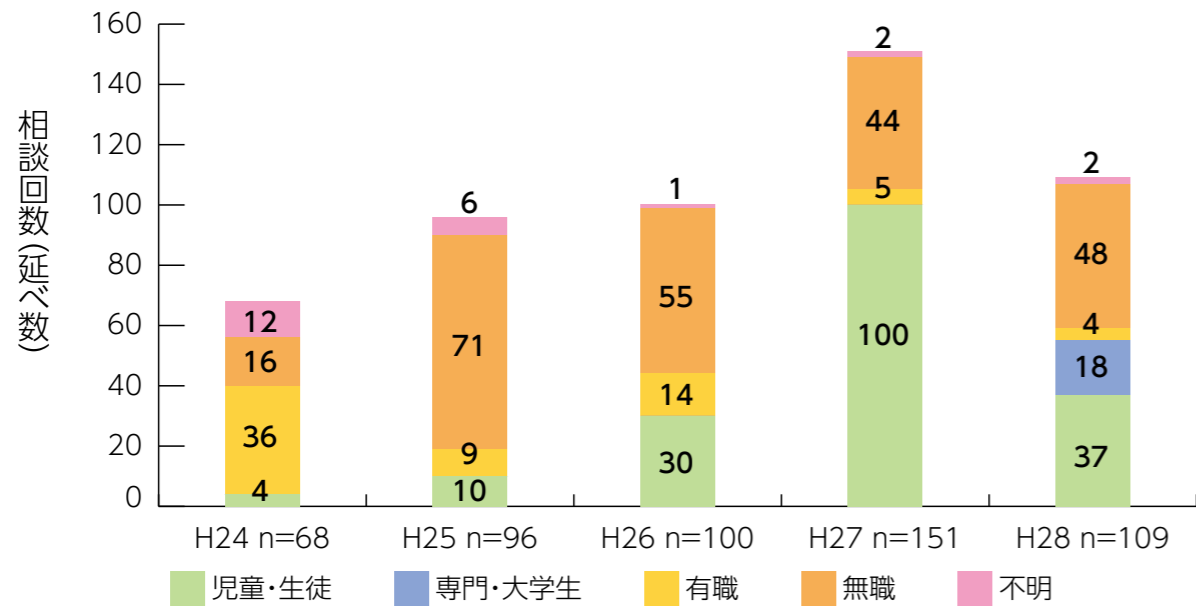


図8-2 本人相談属性推移

③大人(有職/無職/不明)の相談内容

「体調・精神不調」に関する相談割合が最も高く、次いで家族関係・経済的問題などを含む「家庭環境」に関する相談が高い。

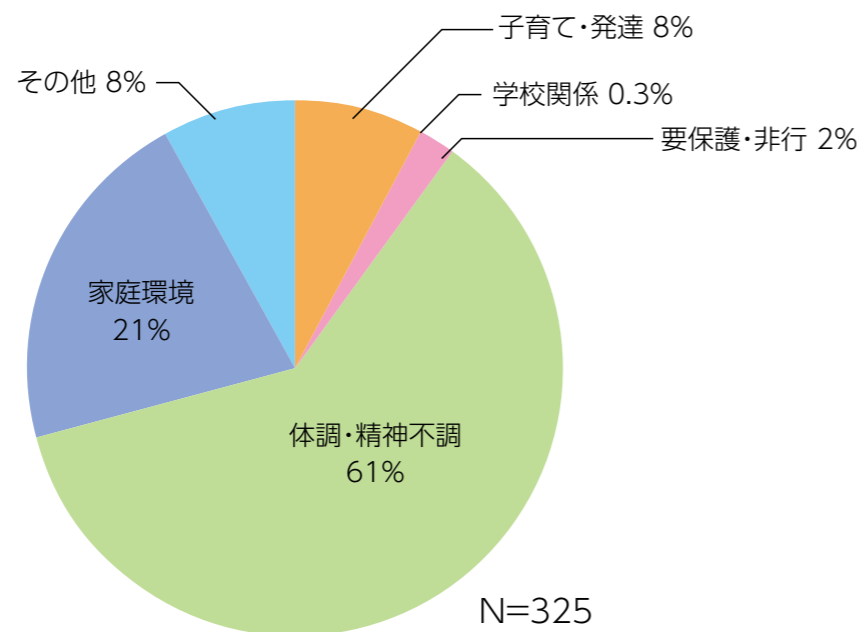


図8-3 本人相談における大人の相談内容

④子ども(児童・生徒/専門・大学生)の相談内容

「学校関係」の相談が約半数、「体調・精神不調」が約3割を占めている。

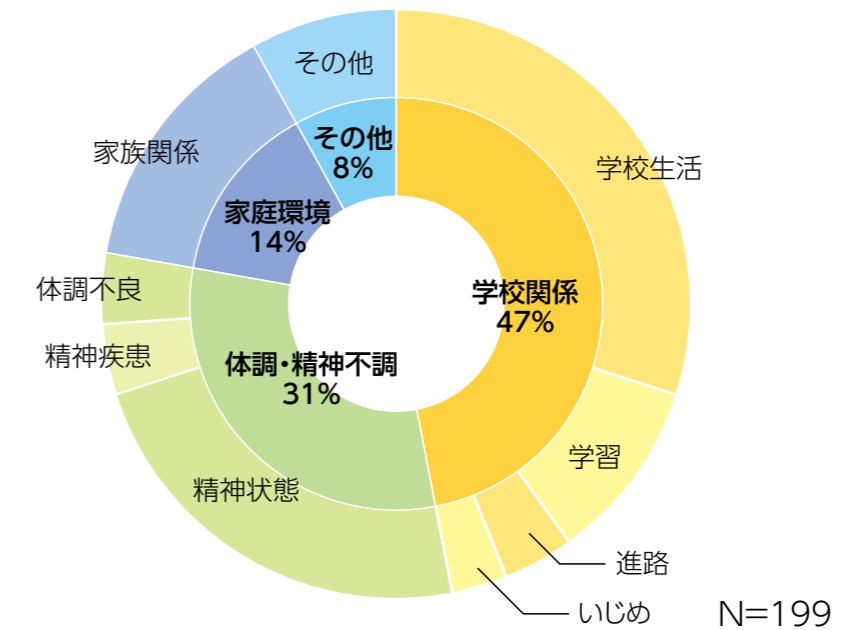


図8-4 本人相談における子どもの相談内容

9 関係者(親族)相談

①相談内容推移

「子育て・発達」に関する相談は平成26年度以降、「学校関係」に関する相談は平成27年度以降、減少している。

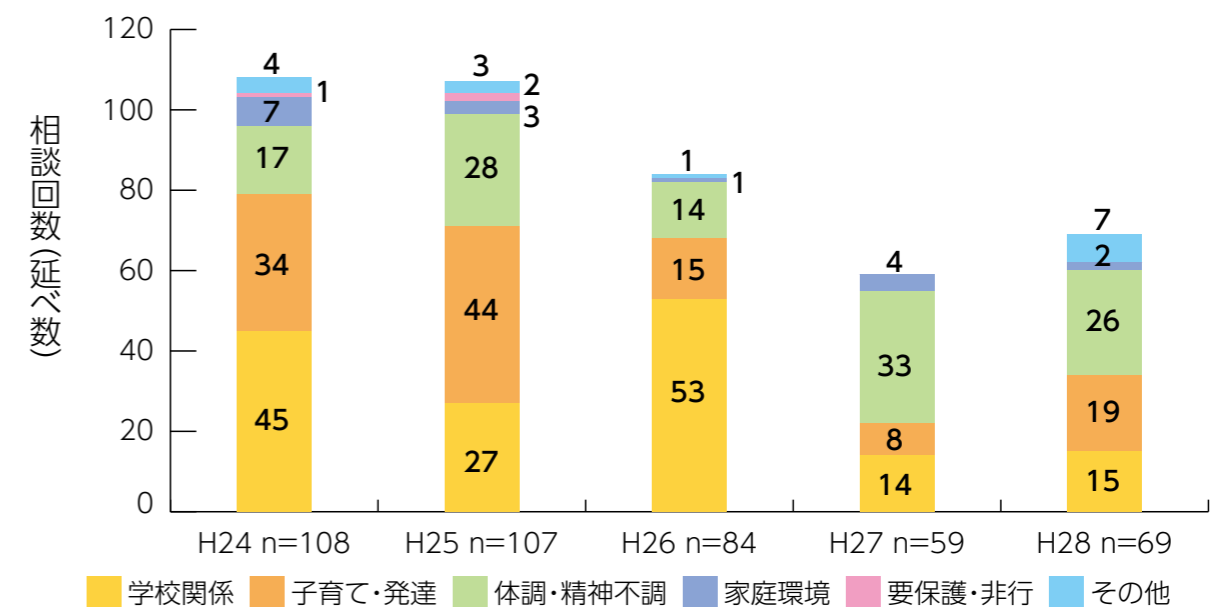


図9-1 関係者相談(親族)における相談内容推移

②対象者の性別推移

関係者（親族）相談において問題を抱えた人を対象者として、その相談回数を集計した。平成24年度から平成28年度までの合計で、男児・男性対象者に関する相談は213回、女児・女性対象者に関する相談は204回、不明は10回であった。

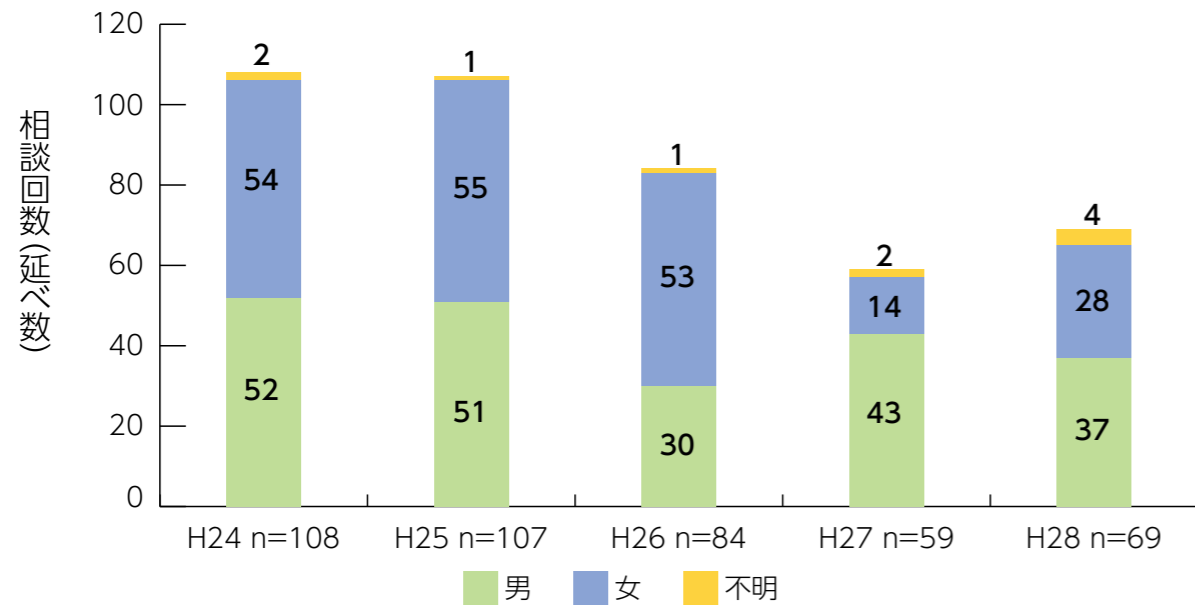


図9-2 対象者の性別推移

③対象者の属性推移

対象者の属性では、「小学生」、「中学生」に関する相談が多い。成人した子どもに関する相談は「その他」に含まれる。

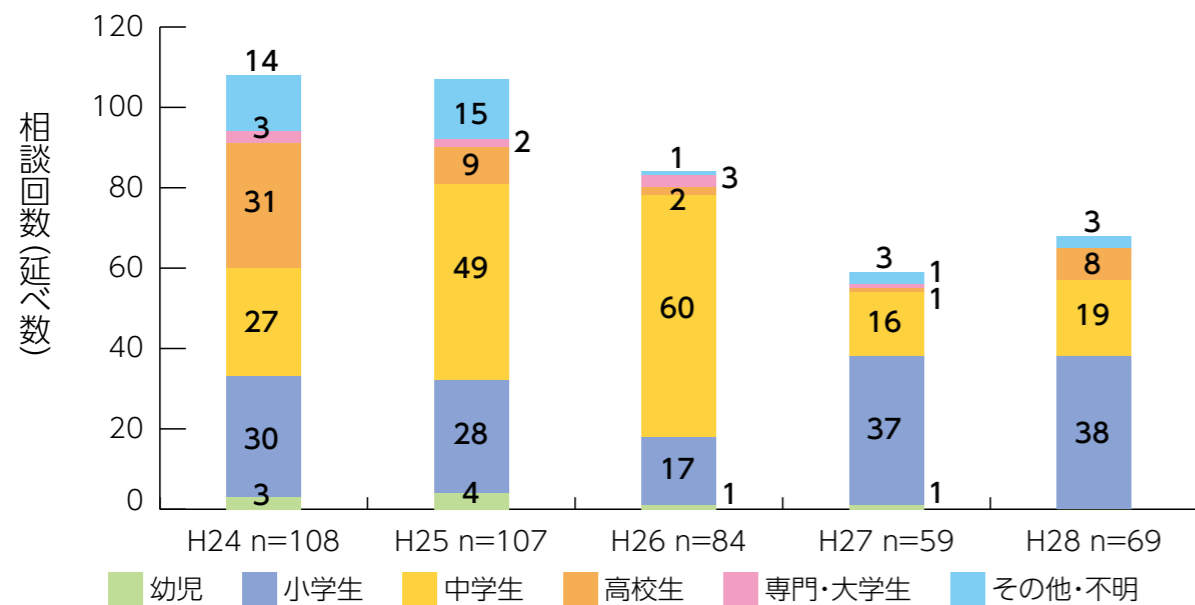


図9-3 対象者の属性推移

④対象者の属性×性別

対象者が「小学生」である相談では男児に関する相談が多いが、「中学生」、「高校生」、「専門・大学生」では、男女ほぼ同数、「幼児」、「その他・不明」では女児・女性が多い。

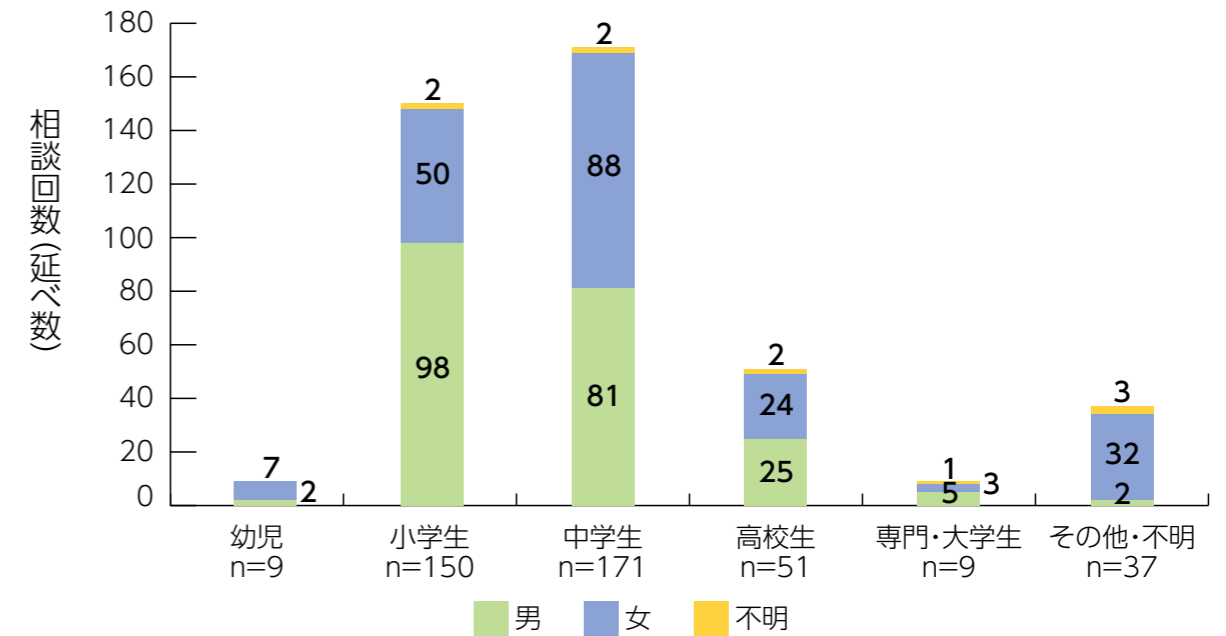


図9-4 対象者の属性×性別

⑤対象者の属性×相談内容

属性ごとに相談内容別相談の割合と相談回数を集計した。「学校関係」に関する相談は「中学生」、「高校生」で割合が高く、「子育て・発達」に関する相談は「幼児」で割合が高い。「体調・精神不調」は「幼児」を除く、すべての年代に一定割合みられる。

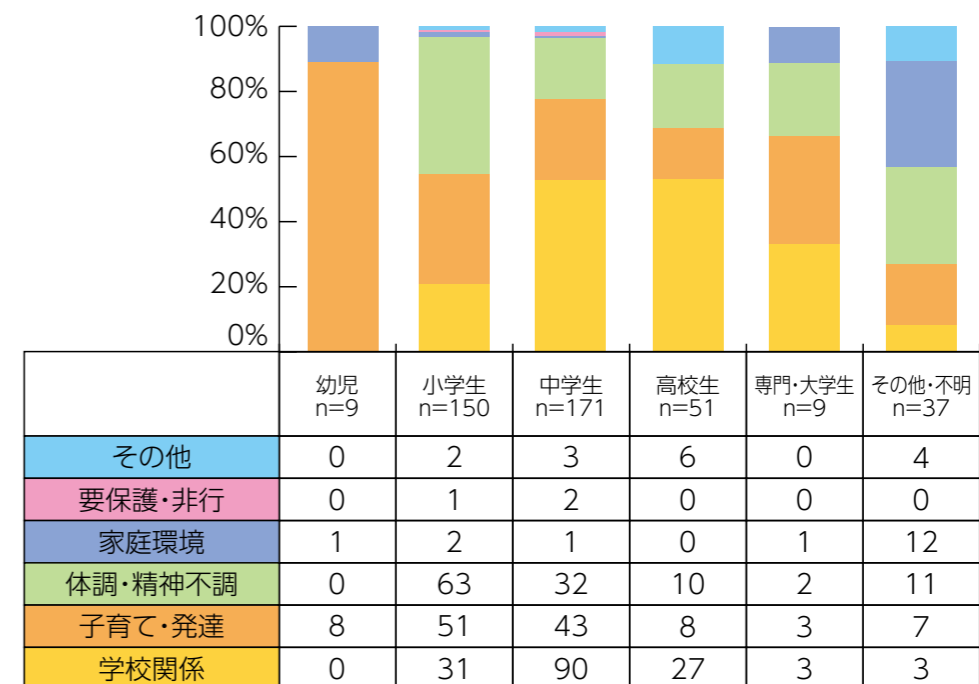


図9-5 対象者×相談内容

10 行政・学校・関係機関による相談の相談内容推移

行政・学校・関係機関相談には、コンサルテーションや情報交換、ケース会議などが含まれる。精神疾患を抱える「体調・精神不調」や虐待・DVが疑われる「要保護・非行」では他機関との連携が多い。

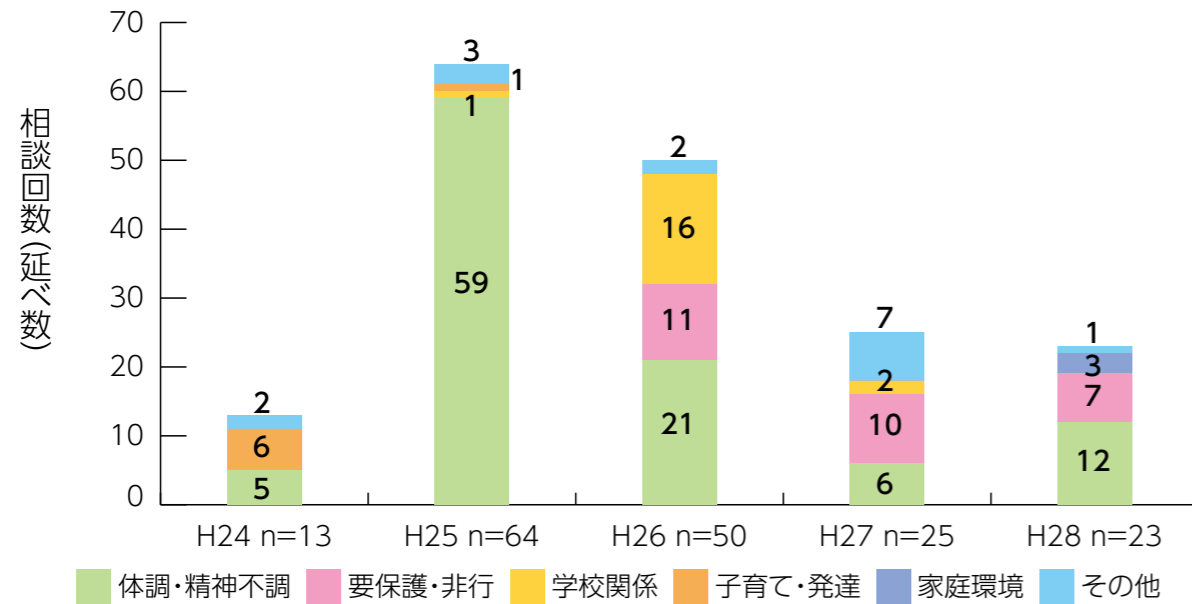
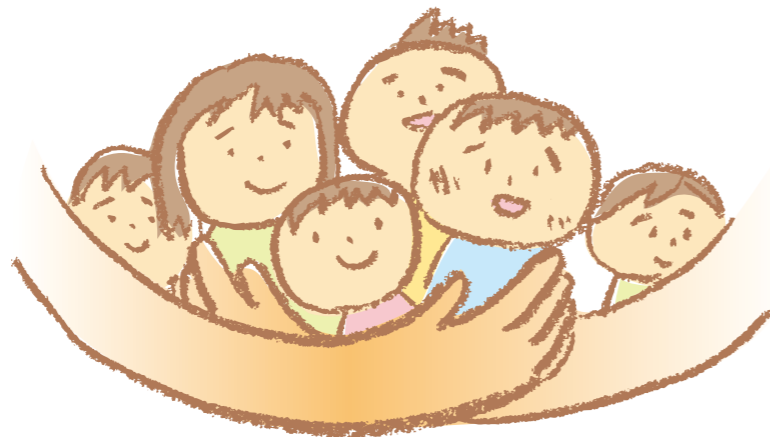


図10 行政・学校・関係機関の相談内容推移



2 親族里親サロン

平成24年から、宮城県東部児童相談所、東部児童相談所気仙沼支所、宮城県里親連合会(現・みやぎ里親支援センター けやき)との共催で、震災孤児を預かっている親族里親に対して、親族里親サロンを行っている。開始当初は、親族との突然の別れによる悲しみや不安を抱えながらも必死に残された子どもを育てなければならないという思いが語られていた。時間の経過とともに子どもの成長に伴った学習面や進学のこと、また里親自身の体調の変化などが話されている。

5年間のサロン開催状況を表1に示した。延べ人数で表示している。

表1：サロン開催状況(2012/5～2017/3)

地区	回数	日付	参加者数	スタッフ	場所
石巻	1	2012年7月3日(火)	7名	8名	東部児童相談所
	2	2012年10月31日(水)	4名	7名	
	3	2013年2月20日(水)	4名	4名	
	4	2013年7月3日(水)	4名	5名	東部児童相談所
	5	2013年11月6日(水)	2名	5名	
	6	2014年2月6日(木)	2名	6名	
	7	2014年5月27日(火)	3名	4名	
	8	2014年8月26日(火)	3名	4名	
	9	2015年2月17日(火)	3名	4名	
	10	2015年5月26日(火)	5名	6名	
	11	2015年8月25日(火)	1名	3名	
	12	2016年2月16日(火)	6名	4名	
	13	2016年5月24日(火)	6名	5名	
	14	2016年8月30日(火)	3名	4名	
	15	2017年2月21日(火)	4名	2名	
	小計		57名		
東松島	1	2012年8月28日(火)	2名	7名	東松島市コミュニティセンター
	2	2012年11月27日(火)	3名	6名	
	3	2013年6月19日(水)	2名	5名	
	4	2013年9月25日(水)	1名	5名	
	5	2014年7月15日(火)	3名	4名	
	6	2014年10月28日(火)	4名	4名	
	7	2015年7月14日(火)	1名	4名	
	8	2015年10月27日(火)	2名	4名	
	9	2016年7月12日(火)	2名	4名	
	10	2016年10月26日(火)	1名	4名	
	小計		21名		
気仙沼	1	2012年5月16日(水)	7名	11名	本吉町公民館
	2	2012年9月6日(木)	6名	10名	
	3	2013年2月1日(金)	6名	6名	
	4	2013年6月5日(水)	3名	11名	
	5	2013年10月2日(水)	4名	7名	
	6	2014年3月6日(水)	5名	6名	
	7	2014年6月18日(水)	2名	6名	
	8	2014年9月17日(水)	2名	6名	
	9	2015年1月28日(水)	1名	4名	
	10	2015年3月4日(水)	2名	4名	
	11	2015年6月17日(水)	3名	5名	
	12	2015年9月16日(水)	3名	4名	
	13	2016年3月2日(水)	2名	3名	
	14	2016年6月15日(水)	3名	5名	
	15	2016年9月14日(水)	2名	5名	
	16	2017年3月1日(水)	2名	4名	
	小計		53名		
名取	1	2013年8月1日(木)	0	3名	中央児童相談所
	2	2014年9月3日(水)	0	1名	
		小計	0		
親睦会	1	2013年12月4日(水)	21名	5名	南三陸ホテル観洋
	2	2014年12月2日(火)	13名	5名	
	3	2015年12月2日(火)	17名	4名	
	4	2016年12月9日(金)	3名	5名	
	小計		54名		
	合計		185名		

3 遺児家庭サロン

宮城県東部保健福祉事務所主催の「震災遺児ひとり親家庭子育て交流会」へファシリテーターとして協力、参加した。今年度は、交流会だけに留まらず、前年度実施したアンケート調査に、子どもの思春期に対する不安が述べられていたこともあり、講演会とサロンを合わせて実施した。

表2：遺児家庭サロン（ひとり親家庭家族交流会）開催状況

年度	日付	参加者	スタッフ	場所	備考
平成25年度	2013年12月8日(土)	3名	2名	石巻中央公民館	午前中クリスマスケーキ作り (子ども総合センター職員、保福職員、学生が子ども達と午前、午後一緒に活動を行った) 午後は親子分かれて親はサロンに出席した。 ファシリテーター:東北大学震災子ども支援室 相談員 平井美弥
	2014年1月19日(土)	3名	2名		午前中餅つき (子ども総合センター職員、保福職員、学生が子ども達と午前、午後一緒に活動を行った) 午後は親子分かれて親はサロンに出席した。 ファシリテーター:東北大学震災子ども支援室 相談員 平井美弥
	小計	6名			
平成26年度	2014年7月9日(水)	1名	3名	東部保健福祉事務所 会議室	平日の昼間にサロンを開催して、子育てのことなどお話しをしました。 ファシリテーター: 東北大学震災子ども支援室 相談員 平井美弥
	2014年9月3日(水)	1名	3名		
	2014年11月12日(水)	1名	3名		
	2014年12月10日(水)	0	3名		
	2015年2月25日(水)	1名	3名		
	小計	4名			
平成27年度	2015年6月3日(水)	2名	4名	東部保健福祉事務所 会議室	ファシリテーター:東北大学震災子ども支援室 相談員 平井美弥
	2016年3月6日(日)	0	4名		お休みの日におやじの会を開きました。 ファシリテーター:東北大学震災子ども支援室 相談員 平井美弥
	小計	2名			
平成28年度	2016年9月26日(月)	3名	4名	東部保健福祉事務所 会議室	講演会(思春期の子育てI)+サロン 思春期の心と身体 講師:東北大学震災子ども支援室相談員 押野晶子
	2016年11月21日(月)	2名	2名		講演会(思春期の子育てII)+サロン 思春期の子育てI 講師:みやぎ心のケアセンター副センター長 山崎剛氏
	2017年1月21日(土)	4名	4名		講演会(思春期の子育てIII)+サロン 思春期の子育てII 講師:みやぎ心のケアセンター副センター長 山崎剛氏
	小計	9名			
	合計	21名			

4 遺児・孤児対象学習支援

しゅくだい塾

仮設住宅で生活する震災遺児・孤児への学習の場の提供及び、震災遺児・孤児に対する学習支援、ひとり親や親族里親に対するレスパイトや大学生スタッフとの交流を目的として、「しゅくだい塾」を行った。

*しゅくだい塾では、毎朝始まりの会を行いその中で、アイスブレイク(ちょっとしたゲーム)や、帰りには終わりの会を行った。レクリエーションでは、だんだん〇〇になるボールゲームや、ジャンケンゲーム、エナジーチェック、絵スチャージョゲーム、好物を当てようジェスチャーゲーム、呼吸法や筋膜ケア等を行った。

表3：しゅくだい塾開催状況（2015年～2016年）

回数	時期	タイトル	開催日	開催時間	開催場所	参加者	学生スタッフ	協力団体
石巻	1	夏休み 第1回夏休みしゅくだい塾	2015年 8月3日(月) ～8月5日(水)	13時～20時(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	あしなが育英会 石巻レインボーハウス	小学生7人 中学生12人 高校生4人 (3日間延べ人数)	学生6人	あしなが育英会東北事務所 宮城県里親連合会 (現:みやぎ親支援センター けやき)
	2	夏休み 第2回夏休みしゅくだい塾	2016年 8月4日(木) ～8月6日(土)	13時～20時(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)		小学生9人 中学生7人 高校生5人 (3日間延べ人数)	学生6人	あしなが育英会 東北事務所
	3	冬休み 第1回冬休み先取り べんきょう会	2015年 12月5日(土) ～12月6日(日)	10時～18時30分(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)		小学生6人 中学生3人 高校生3人 (2日間延べ人数)	学生5人	あしなが育英会東北事務所 宮城県里親連合会 (現:みやぎ親支援センター けやき)
	4	秋の夜長 第1回秋の夜長しゅくだい塾	2016年 11月26日(土) ～11月27日(日)	11時～20時(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)		小学生14人 中学生6人 高校生1人 (3日間延べ人数)	学生6人	あしなが育英会 東北事務所
陸前高田	1	夏休み 第1回夏休みしゅくだい塾	2016年 8月9日(火) ～8月10日(水)	10時～18時30分(50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	あしなが育英会 陸前高田 レインボーハウス	小学生8人 中学生7人 高校生2人 (2日間延べ人数)	学生5人	あしなが育英会 東北事務所



5 支援者支援

他機関の事業への協力や、サポートを提供したい側と受ける側のニーズに合わせた情報の提供や橋渡しを行った。

1 ストレスマネジメント事業

あしなが育英会新人スタッフに対して、1年目は毎月1回、2年目は隔月でストレスマネジメントを行った。(2012年～2013年度)

*筋膜ケアとは、筋肉ついている薄い膜である筋膜をほぐすことにより、血管やリンパの流れ、神経系の動きがよくなり、心身の疲労回復に効果が期待できるものである。

表4：あしなが育英会新人スタッフ向けストレスマネジメント事業

日付	内容	場所	日付	内容	場所
2012年5月23日	グループワーク	あしなが育英会 東北事務所	2012年12月19日	粘土	あしなが育英会 東北事務所
2012年6月13日	グループワーク+筋膜ケア		2013年2月6日	グループワーク	
2012年7月4日	グループワーク+筋膜ケア		2013年5月8日	グループワーク+筋膜ケア	
2012年7月18日	筋膜ケア、自律訓練法		2013年7月3日	共同絵画	
2012年8月22日	グループワーク+筋膜ケア		2013年9月4日	コラージュ	
2012年9月26日	グループワーク+筋膜ケア		2013年11月13日	筋膜ケア	
2012年10月24日	グループワーク+筋膜ケア		2014年1月22日	筋膜ケア	
2012年11月21日	コラージュ				

2 スーパーヴァイズ事業 東部児童相談所里親担当対象

宮城県東部児童相談所では、震災によって管轄する石巻地域において親を亡くした子ども達が大変多く、さらに親族里親となられた方々や養育里親への相談援助が早急に求められた。里親担当職員はこれまでの里親支援とは異なった活動が必要となったうえ、加えて、対応の難しさというものを抱えていた。そこで、児童相談所からの依頼を受け、担当職員への相談援助活動に対する助言ならびに心理的負担を軽減することを目的としたスーパーヴァイズを行った。

表5：東部児童相談所里親担当者スーパーヴァイズ事業

日付	場所
2012年11月14日	東部児童相談所
2012年12月17日	
2013年4月26日	
2013年5月14日	
2013年7月9日	
2013年12月11日	
2014年3月11日	

6 研修・講演・出前授業

公益財団法人 みちのく未来基金

みちのく未来基金は、2011年9月に震災遺児孤児を対象とした、高校卒業後の進学のための学費支援を目的に発足した。毎年多くの子ども達に専門学校や短大、大学へ進学するための学費支援を行っている。基金のスタッフは、学費支援を行う高校生に毎年1回の面接、また日々学生のさまざまな相談を受け支援をしている。そうしたスタッフを対象に「基本的な関わりの姿勢と技法—みちのく生の面談のために—」というテーマで研修を行った。

表6：みちのく未来基金スタッフ向け研修会

日付	場所
2014年10月27日	みちのく未来基金事務局
2015年8月21日	
2016年8月31日	

7 関係機関との連絡会議

南三陸町保健福祉課

南三陸町保健福祉課が主催し、震災後の子どもたちの心身の健康と健全な発達を支援していくための目的で、平成24年度から「南三陸町子ども支援連絡調整会議」運営実施への協力を行った。調整会議の実施によって、地域の各幼児・児童・生徒関連施設や、保健福祉課が情報交換し連携を深めた。

*構成メンバーは、2015年まで、町内の保育士・幼稚園教諭・小・中・高等学校の養護教諭、南三陸町健康増進係の職員であった。2016年から先のメンバーに加えて、南三陸町病院関係者も加わった。

表7：南三陸連絡調整会議

日付	場所
2012年10月17日	志津川保健センター会議室
2013年1月30日	
2013年7月24日	
2014年11月5日	
2015年8月18日	総合ケアセンター南三陸会議室
2017年1月30日	



8 震災子ども支援室主催による会議、シンポジウム、研修会・座談会

1 シンポジウム

表8：震災子ども支援室主催シンポジウム開催状況（2011年～2017年）

回	日付	参加者	概要
第1回	2011年11月12日	80名	「震災子ども支援室 開室記念シンポジウム～親を亡くした子どもに対する支援の中長期的展望～」 ・宮城県保健福祉部子育て支援課課長 小林一裕氏 ・あしなが育英会東北事務所長 林田吉司氏 ・宮城県里親連合会会長 卜蔵康行氏 ・東北大学大学院教育学研究科教授 本郷一夫氏
第2回	2012年3月3日	57名	「東日本大震災後の子ども支援」 ・報告1 教育現場からみえる中学生の姿 震災直後から現在までの子どもたちの様子から 石巻市立万石浦中学校教諭 鹿野宏美氏 ・報告2 福島で今、何が起きているのか～心のケアの今後を考える～ 放射能被害を受けている福島の子どもの保護者の声から 福島県スクールカウンセラー 須藤弘美氏 ・報告3 震災と子どものこころ 宮古子どものこころのケアセンターでのとりくみから 盛岡少年刑務所医務課医師(児童精神科医) 八木淳子氏
第3回	2012年9月15日	73名	「東日本大震災後の子ども支援～診察室や保健室から見える子ども達～」 ・報告1 一歩前進～子どもたちを癒すもの～ 石巻市立門脇中学校養護教諭 伊藤香織氏 ・報告2 福島における心理面の課題 東北福祉大学教授 渡部純夫氏 ・報告3 小児科の診察室から～これまでの経過と今後の課題～ 医療法人豊島医院 豊島喜美子氏
第4回	2013年3月2日	40名	「東日本大震災後の子ども支援 災害を経験した子どもたち～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～」 ・北海道大学大学院理学研究員附属地震火山研究観測センター助教 定地祐季氏
第5回	2014年2月1日	39名	「東日本大震災後の支援の多様性」～電話相談ができること～ ・報告1 “仙台のいのちの電話は、震災後の状況にどのように対応したか” ～被災地の切実な声は何を訴えていたか 仙台のいのちの電話 田中聡子氏 ・報告2 “被災地 からこころステーション電話相談の現状” からこころステーション 高柳伸康氏 ・報告3 “電話相談からみえてきたもの”～S-チルでのとりくみから～ 東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル” 相談員 平井美弥氏
第6回	2015年2月7日	34名	「東日本大震災で親を亡くした子どもへの支援」～震災後4年目の現状と課題～ ・報告1 “遺児家庭支援の現状と課題”～交流会を立ち上げるまでの経過～ 宮城県東部保健福祉事務所 保健師 三澤美香氏 ・報告2 “震災遺児に進学の夢を”～みちのく未来基金の活動から～ 公益財団法人「みちのく未来基金」 中村杏奈氏 ・報告3 親族里親調査からみえてきたもの 東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル” 相談員 押野晶子氏
第7回	2016年2月28日	35名	「東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援」～それぞれの専門性を活かして～ ・報告1 学習支援の領域から “創業20年の学習塾の経営資源を活かした震災遺児への無料学習支援事業” 株式会社セレクトィー 代表取締役 畠山明氏 ・報告2 歯科の領域から “矯正歯科専門医は震災で親を亡くした子どもたちにどんな支援ができるのか” ～日本臨床矯正歯科医会事業と個人プロボノとで支え続ける口腔成育～ 伊藤矯正歯科クリニック 院長 伊藤智恵氏 ・報告3 法律の領域から “震災で親権者を失った子どもたちに(未成年後見人)として関わっている 「弁護士」からの報告” 弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島伸行氏
第8回	2017年2月18日	45名	“東日本大震災後の子ども支援”～岩手・宮城・福島の6年間～ ・宮城から 「被災地の日常と学校教育相談活動」 ～被災地内支援者から見えてくるもの～ 宮城県スクールカウンセラー 星美保氏 ・福島から 「東日本大震災・原発事故と福島の子どもの」 ～長期避難とその影響について～ 特定非営利活動法人ビーンズふくしま 常務理事 中鉢博之氏 ・岩手から 「5年間の相談支援活動をふりかえる」 ～大槌町子育て支援センターでの取組みを中心に～ 臨床心理士 土屋文彦氏

*2017年第8回シンポジウムの詳細 シンポジウム「東日本大震災後の子ども支援」～岩手・宮城・福島の6年間～
東日本大震災から6年を迎えます。岩手・宮城・福島において被災された子ども達やその保護者の支援に携わってきた、支援者の方々の報告を
もとに、今後の展望について議論した。(平成29年2月28日(日)、東北大学文科系総合研究棟11階大会議室、参加者数40名)



報告 1

宮城から

「被災地の日常と学校教育相談活動」
～被災地内支援者から見えてくるもの～



宮城県
スクールカウンセラー
星 美保氏

学校の教育相談の仕事をして16年、カウンセラーとして10年目。担当する複数の学校
に週に1回から月に1回くらいの頻度で勤務している。自身も被災し、5か月間の避難
所生活を経て仮設住宅に住みながら、子ども達の日常を地域の大人として、あるいは
学校ではカウンセラーという立場で見守ってきた。現地で環境を共にして、子どもの
日常に寄り添う支援を心がけてきた。いつもの生活が子どもにとって安心安全な日
常になることは一番の望みであり、心のケアにつながるのではないかと考えている。

報告 2

福島から

「東日本大震災・原発事故と福島の子どもの」
～長期避難とその影響について～



特定非営利活動法人ビーンズふくしま
常務理事
中鉢 博之氏

福島の避難は避難先が県内もあり県外もあり、避難されている方を受け入れている
地域の中で出来ることとして、県内では放課後や土曜日の学習支援活動、避難先から
戻ってきた保護者が安心して過ごせる居場所作りの「ままカフェ」の開催。また、県
外避難者を対象とした、避難先での避難者交流会を開催し、県内外の避難者支援に
取り組んでいる。長期化する避難に伴う二次的・三次的な問題や課題に、今必要な支
援というのを一つ一つ作っている現状である。

報告 3

岩手から

「5年間の相談支援活動をふりかえる」
～大槌町子育て支援センターでの取組みを中心に～



臨床心理士
土屋 文彦氏

被災の直後は支援者の方を対象にした「分かち合いの会」を立ち上げて運営して
おり、支援者支援が中心の活動であった。その後、“大槌町子育て支援センターかり
ん”での支援活動に従事している。“かりんカフェ”というお茶を飲みながら雑談する
場を設けたり、そこで臨床心理士の相談日をつくるなど、かりんを活用した地域精神
保健活動を展開中である。自身の課題や心がけとして思うところは、地域の現状が
しっかりと見えていて、地域のニーズにマッチした活動になっているかを意識するこ
と。今後も、臨床心理士として現場で出来る活動を模索していきたい。

2 研修会

震災子ども支援室が主催し、遺児孤児家庭向けの研修会を各地で行った。

表9：震災子ども支援室主催研修会開催状況（2011年～2017年）

回数	日付	参加者数	場所	題名	講師
第1回	2011年11月1日	30名	東北大学大学院教育学研究科総合研究棟	「東日本大震災後のケアのあり方」	東北大学大学院教育学研究科教授 本郷 一夫氏
第2回	2012年10月20日	16名	気仙沼市中央公民館	みんなで支える子育てイン気仙沼「父子家庭の抱える現状と課題」	NPO法人全国父子家庭支援連絡会 理事 村上 吉宣氏
第3回	2012年11月10日	15名	亘理町中央公民館	みんなで支える子育てイン亘理「父子家庭の抱える現状と課題」	NPO法人全国父子家庭支援連絡会 理事 村上 吉宣氏
第4回	2014年7月7日	17名	気仙沼保健福祉事務所	「未成年後見人制度・里親制度についての研修会」	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏
第5回	2014年10月20日	30名	宮城県東部児童相談所(石巻市)	「未成年後見人制度・里親制度についての研修会」	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏
第6回	2014年11月4日	19名	TKP仙台西口ビジネスセンター	「未成年後見人制度・里親制度についての研修会」	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏



3 徳島県科学技術高等学校生徒の方への講話

徳島県森林づくり推進機構と寄贈先の橋渡し役を行った関係から、木製遊具を作成した、徳島県立徳島科学技術高等学校の生徒方々に対して講話を行った。

表10：徳島県科学技術高等学校の生徒向け講話

回数	日付	場所
1	2013年12月13日	東北大学大学院教育学研究科
2	2014年12月12日	
3	2015年12月11日	



4 みちのく生との座談会

公益財団法人みちのく未来基金から給付を受けている、現在大学生となった“みちのく生*”との座談会を行い話を伺った。お話の中からは、「現在地元から離れているが、今後どう地元と関わって言ったらよいか」などの地元への思いが強くだされていた。

*みちのく生とは、公益財団法人みちのく未来基金の支援を受けて、大学等に進学している、震災遺児・孤児のことである。

表11：みちのく生との座談会

回数	日付	参加者数	スタッフ数	場所
1	2015年3月26日	4名	2名	東北大学大学院教育学研究科
2	2015年3月31日	1名	2名	
3	2015年9月24日	4名	2名	
4	2016年9月6日	3名	2名	

9 親族里親面接調査・遺児家庭アンケート調査

1 親族里親調査

東日本大震災で遺児孤児となったお子さんを、親族里親という制度を利用して、祖父母や叔父叔母が親族里親となり、子どもたちを養育している。突然に保護者になられた親族里親は、自身の喪失の悲しみと向き合いながら、日々子どもたちと接している。そうした方々が、どのような気持ちで子どもたちを受け入れ、どのようなことに戸惑いながら、子育てをおこなっているのかについて調査し明らかにすることで、今後どのような支援が求められているのかについて検討することを目的として調査を行った。

結果の記述に関しては、当事者だけでなく関係者についても、個人が特定されないよう配慮し、結果は調査目的以外には使用しないこととした。

なお、本調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会において実施の承認を受けた。(承認ID:13-1-008)

① 調査協力者

震災子ども支援室、宮城県里親会、宮城県東部児童相談所の共催で行っている、親族里親サロンに出席したことがある親族里親14家族に対して約1時間程度の半構造化面接を行った。

② 調査時期

平成25年10月～11月

③ 調査内容

1. 親族里親制度について(里親制度の認知)
2. 親族里親になった時の気持ち
3. 子どもの生活への配慮や工夫・困っていること
4. 役に立った支援、使いにくかった支援
5. 現在の気持ち

④ 結果(詳細は「この子を育てる」をご覧ください)

突然、親族里親になられた方々の多くは、戸惑いの中、市町村等を通じて里親制度を活用することとなった。その当初は、里子の将来や血のつながらない配偶者への心配はありつつも、引き取るのは当然であるという覚悟をもって育てることを決意した。その後は、亡くなった方への思慕や、震災で親を失った子どもの気持ちへの思い、不安・心配はありつつも子どもの成長を喜びながら生活していることがわかった。

2 遺児家庭アンケート調査

宮城県東部保健福祉事務所の依頼を受け、東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家庭へのアンケート調査を行った。

本調査の目的は、第1は平成23年3月11日の東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育している震災遺児家庭の保護者を対象として、現在の子育て状況、生活状況に関しての心配や困っていること、保護者自身の精神状態についての回答を得ることで、震災遺児家庭の現状を理解すること。第2の目的は、宮城県東部保健福祉事務所と東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル”(以下“S-チル”と表記)が連携して実施している“保護者交流会(ぼっかぼかサロン)”への関心や参加動機等を尋ねることにより、今後の支援活動を検討する資料を得ることであった。これらをまとめて、今後の事業や支援活動をより充実させることを目指して本調査を行った。

① 対象者

石巻市、東松島市、女川町の遺児家庭184世帯保護者

② 実施時期と回収数

平成27年6月24日(水)～7月15日(水)までの期間に各家庭に郵送法で送付した。配布数184通のうち、回収数は70通(回収率38.0%)であった。

③ 倫理的配慮

アンケートに記述された個人情報は、宮城県東部保健福祉事務所が適切に管理し、“S-チル”は、個人情報をのぞいた回答部分のみを統計的に処理した。分析と結果のまとめについて、個人が特定されることはないことを紙面によって通知した。

なお、本調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会において実施の承認を受けた。(承認ID:15-1-002)

④ 質問内容

1. 子育てについて
2. 生活について
3. 精神傾向の程度
4. “保護者交流会(ぼっかぼかサロン)”について
5. 支援的介入の希望

⑤ 結果(詳細は「東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家庭へのアンケート実施報告書」をご覧ください)

遺児家庭の親御さんの中には、弱音など他に言いたくない、洗いざらい表に出すことが出来ないという思いを持つ方もある。家族、親せき、友人は必要不可欠なサポートとして重要であることは間違いないが、その身近さ故に、気遣いや葛藤も生じやすく、本音を抑えてしまうというストレスも考えられる。対象の方々の身近なサポート状況を確認しながら、支援のタイミング、方法、内容について、長期的視野のもとに丁寧に検討し、かつ、常日頃の見守りの姿勢を土台として、必要な時に支援を求めてもらうことができる関係づくりを目指すことが必要ではないかと思われた。

10 広報・出版物・報告書・執筆

2011年・2012年度

- 1 震災子ども支援室 開室式
(平成23年11月12日(土)、
東北大学文科系総合研究棟11階大会議室)
- 2 開室記念シンポジウム「親を亡くした子どもに対する
支援の中長期的展望」
(平成23年11月12日(土)実施) 報告書作成と配布
- 3 シンポジウム「第1回東日本震災後の子ども支援
～震災から1年を振り返って～」
(平成24年3月3日(土)実施) 報告書作成と配布



初回チラシ 東日本大震災後の子ども支援 開室記念 報告書 東日本大震災後の子ども支援 第1回 報告書

- 4 「震災子ども支援室」広報ポスター、チラシ、カードの作成、
自治体と関連団体、学校に配布。FREEPAPER(ままばれ宮城版)に掲載。



- 5 東北大学Annual Review 2012 p11「震災子ども支援室の立ち上げ:培った地域臨床のノウハウで支援」
(Tohoku University Annual Review 2012 p11 "Establishment of the Support Office for Children in the
Aftermath of the 2011 Japan Earthquake; Support with developed community clinical practice know how")

- 6 東北大学 復興アクション「日本復興の先導」を目指して 第2版に掲載。
- 7 国際紙パルプ商事株式会社CSRレポート2012 に掲載。

- 8 シンポジウム「第2回東日本震災後の子ども支援
～診察室や保健室から見える子ども達～」
(平成24年9月15日(土)実施) 報告書作成と配布



東日本大震災後の子ども支援 第2回 報告書 東日本大震災後の子ども支援 第3回 報告書

- 9 講演会「第3回東日本震災後の子ども支援
災害を経験した子どもたち
～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～」
(平成25年3月2日(土)実施) 報告書作成

- 10 フェイスブック作成。ホームページとリンク。
<http://www.sed.tohoku.ac.jp/~s-children/>

- 11 研修会資料の電子ジャーナル化
(東北大学中央図書館)

- 12 2月11日 公開復興サポート明日へ in東北大学
(於:片平北キャンパス)

- 13 文教ニュース 第2209号に掲載

- 14 文教速報 第7783号に掲載

15 平成23・24年度 年次報告書



2013年度

- 1 宮城県子育て支援課作成
みやぎっ子応援通信第5号「子ども・子育て
応援団体からのお知らせ」欄に掲載

- 2 「震災子ども支援室」
広報ポスター、チラシ、カードの作成、
自治体と関連団体、学校に配布



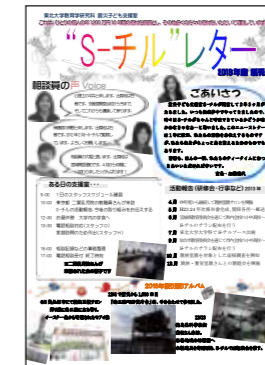
- 3 FREEPAPER (ままばれ宮城版)に掲載



- 4 東北大学オープンキャンパスに出展
(平成25年7月30、31日)



- 5 「S-チル」ニュースレターの作成と配布



- 6 シンポジウム報告書
「第5回東日本大震災後の支援の多様性」
～電話相談ができること～の作成と配布



- 7 ホームページの刷新、フェイスブック更新

- 8 研修会資料の電子ジャーナル化
(東北大学中央図書館)

- 9 平成25年度 年次報告書



2014年度

1 「この子を育てる」
(親族里親調査の
回答をまとめた冊子)



2 シンポジウム報告書
「東日本大震災で親を亡くした
子どもたちへの支援」
～震災後4年目の現状と課題～
(平成27年2月7日(土)実施)
報告書作成と配布



3 「震災子ども支援室」
青年期用広報チラシ



4 FREEPAPER (ままばれ宮城版)に掲載



5 東北大学オープンキャンパスに出展
(平成26年7月30、31日)



6 “S-チル”ニュースレターの作成と配布



7 ホームページの刷新、フェイスブック更新

8 研修会資料の電子ジャーナル化
(東北大学中央図書館)

9 第3回国連防災世界会議出展
(平成27年3月14～18日)

10 Raising this child
(この子を育てる)
英語版



11 震災子ども支援室各チラシ 英語版



12 平成26年度 年次報告書



2015年度

1 「未成年後見人制度・
里親制度について」
報告書



2 「東日本大震災で
親御さんをなくされた
お子様を養育なさっている
ご家族への
アンケート実施報告書」



3 「東日本大震災で
親御さんをなくされた
お子様を養育なさっている
ご家族の現状」
東日本大震災による遺児家庭
へのアンケート調査のまとめ
(パンフレット)



4 シンポジウム報告書
「東日本大震災で親を亡くした
子どもたちへの支援」
～それぞれの専門性を活かして～
(平成28年2月28日(日)実施)
報告書作成と配布



5 平成27年度
東日本大震災心の復興事業こころの復興フォーラム in みやぎ
～子どもたちの未来のために～ 報告書P.7-22.

6 日本災害看護学会誌第17回年次大会講演集P.61

7 大震災に学ぶ社会科学 第6巻
復旧・復興へ向かう地域と学校
「寄付金による子ども支援活動の模索と展開」
東北大学大学院教育学研究科
「震災子ども支援室“S-チル”」の3年間
P.211-228

8 FREEPAPER (ままばれ宮城版)に掲載



9 東北大学オープンキャンパスに出展
(平成27年7月29、30日)



10 “S-チル”ニュースレターの作成と配布



11 ホームページの刷新、フェイスブック更新

12 震災子ども支援室各チラシの刷新・配布



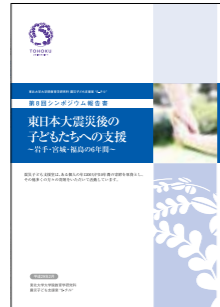
13 平成27年度 年次報告書



活動内容

2016年度

- 1 シンポジウム報告書
「東日本大震災後の
子どもたちへの支援」
～岩手・宮城・福島の間～
(平成29年2月18日(土)実施)
報告書作成と配布



- 2 “S-チル”ニュースレターの作成と配布



11 その他の活動

徳島県森林づくり推進機構では、「とくしま協働の森づくり事業」を展開していた。その事業の一環として、徳島県立徳島科学技術高等学校の作成した木製遊具を、宮城県内で被災した幼稚園等に寄贈する活動を行っていた。震災子ども支援室は、徳島県森林づくり推進機構と寄贈先の橋渡し役を行った。

年 度	寄 贈 先
2014年度	巨理町吉田保育所・巨理町吉田西児童館・巨理町荒浜保育所・巨理町荒浜児童館
2015年度	南三陸町戸倉保育所・南三陸町伊里前保育所

2011年度から、これまで作成している各種報告書を、希望される方には郵送することが可能です。ご希望の冊子(複数可)、ご氏名、ご郵送先、ご所属をお書き添えの上、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

問い合わせ先

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 E-mailアドレス s.children@sed.tohoku.ac.jp

編集者

- 加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科教授
震災子ども支援室室長
- 一條 玲香 震災子ども支援室特任助教
- 平井 美弥 震災子ども支援室主任相談員
- 押野 晶子 震災子ども支援室相談員
- 大堀 和子 震災子ども支援室相談員

平成28年度

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”

震災子ども支援室 6年間の活動報告書
-2011年～2016年のまとめ-

2017年11月1日

発行者 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
代表者 加藤 道代
住 所 仙台市青葉区川内27-1
Tel/Fax 022-795-3263
E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp